

『イソップ伝』研究

— 人名・地名などの異同について —

村 上 勝 也

はじめに

邦訳『伊曾保物語』および『イソポのハブラス』（以後それぞれ「古活字本」・「天草本」と呼ぶ）における固有名詞（人名・地名）の異同を検討することにより、それらの「底本」推定の一助としたい。まず、音声面に関して、次いで文字（綴り字）についても多少触れてみたい。推論の展開上、「邦訳二種」の共通の「祖本」として、「原伊曾保物語」を想定する従来の説をとる。¹⁾ 参照テキストと本稿での略称を以下に挙げておく。

- K. 古活字本『伊曾保物語』, A. 天草本『イソポのハブラス』²⁾
 Lat. ラテン語本(1530/1542), St. Steinhöwel訳(ラテン語訳併載: 1480頃)
 Tup. Tupper訳(ラテン語訳併載: 1485), Mac. Macho訳(1483/1486)³⁾
 Cax. Caxton訳(1484), Sp. スペイン語訳(1489), Fr. フランス語訳(1561/1645)
 It. イタリア語訳(16世紀中葉), L'Estr. L'Estrange 訳(1699)

1. Amonia (あもうにや) について

イソップの生まれた村とされる Amonia(あもうにや) は「天草本」と「古活字本」で一致する。この語は、上に挙げたヨーロッパの諸訳本では以下の如くである。

- St. Ammonio(Lat. Ammonio), Tup. Epamónio(Lat. Ammonio), Mac. Amonneo,⁴⁾
 Cax. Amoneo, Sp. amonja, Lat. Amorio(1530), Ammorio(1542), It. Amorio,
 Fr. Ammorion(1561), Ammorion(1645), L'Estr. Ammorius, (Cf. Gr. amorio)

以上の如く、厳密な意味で — -i-, -j- の違いは別として — 「天草本」の表記と語末音 -a までピッタリと一致するのは、スペイン語訳のみである。もう一点留意すべきことは、-n- と -r- の異同である。ラテン語本(1530/1542) と、それを「底本」としたと見做される16世紀以降の訳では、-r- 系と言える。他方、Steinhöwelと、その直系の15世紀末の諸訳本では — 併載のラテン語訳も含めて — -n- となっている。換言すれば、この語は「アモリオ」系と「アモニオ」系に大きく分かれ、「邦訳二種」は後者に属す、と言えよう。さらに、邦訳の場合は、語末音 -a においても両者が一致し、スペイン語訳

以外の「アモニオ（アモネオ）」系とは、この点に関しては不一致を見せる。両邦訳での「アモニヤ（あもうにや）」は、「原伊曾保物語」におけるその存在を示唆すると同時に、その「底本」はこの「スペイン語訳」に近いものが推定される所以である。

2. Gripho（きりほ）について

「天草本」と「古活字本」で一致する、興味あるもう一つの語——これは固有名詞ではないが——は Gripho(きりほ)「獅子の身体に鷲の頭をもつ想像上の怪獣」である。この語は、筆者がこれまで管見できた、いかなるヨーロッパの訳本にも見出せないものである。そこでは全て「鷲(aquila, adler, aquilino, aygle, Egle)」が当てられており、ラテン語本(1530/1542)の原典である、ギリシア語本でも <aetos>である。従って、この語の場合も、邦訳「祖本」における同語(<Gr. gryps>)の存在を想定させる。しかし、その「底本」らしきものは、上で述べた如く、いまだ管見できず、訳者(ポルトガル人宣教師)自身による改変の可能性も残るのである。将来、この語の現れる訳本が見つければ、当然それは有力な「底本」として注目されることとなろう。

3. Lycero（りくうるす）と Nectenabo（ねたなを）

音声表記上、両邦訳で一致しない例として、まず2語を取り上げる。古活字本の「りくうるす」（「りくうるす」が一例見られる）・「ねたなを」のいずれも、第二音節で天草本(Lycero, Nectenabo)と異同を見せる。なお、前者の場合は、語末音節の <-ro>と「るす」の違いもあるが、これについては後述したい。ヨーロッパの諸本について以下に挙げる。

St. Licurus(Lat. Lycurus), Tup. Licuro(12)/Lycuro(7)/Lyguro(1)(Lat. Lycurus(18)/Licurium(1)), Mac. Licure/Licurius(1), Cax. Lycurre/Sycurre(1)/Lycurius(1), Sp. licurus, Lat. Lycerus, It. Liceto/Licetto(1), Fr. 1561 Lycerus, 1645 Lycerus/Licerus(1), L'Estr. Labynetis, ⁶⁾ (Cf. Gr. lykēros)

以上の如くバビロニア王の名は「リクルス」系と「リケルス」系に分かれる。「古活字本」は前者の、「天草本」は後者の系統である。これは何を意味するか？両邦訳の祖本(原伊曾保物語)は「リクルス」系のヨーロッパ本を「底本」としたものであり、それを「古活字本」は継承し、「天草本」の訳者は、この語の場合は、「リケルス」系の訳本を改めて参照し、改変したものと推定する。⁶⁾ Nectenaboの場合も同様のことが言える。

St. Nectanabus(Lat. Nectanabo), Tup. Nectanabo(Lat. Nectanabo/Nectanabi(1)/Nactanabo(1), Mac. Natenabo(3)/Netanabo(1)/Netanabus, Cax. Nectanabus, Sp. nectanabo, Lat. Nectenabo, It. Nectenabo/Nectenebo(1), Fr. Nectenabo, L'Estr. Amasis, ⁷⁾ (Cf. Gr. nektenabō)

すなわち古活字本の「ねたなを」系と天草本の「ネテナボ」系である。因みに、このエジプト王の名前の場合、辞書では種々の形が見られる(Gr. Nektanabis; Lat. Nectanabis/

4. Esopo(いそほ), Enno(えうぬす), Samo(さん)

これらを普通に音読すれば、それぞれ エソポ・エンノ・サモであろう。まず「イソップ」その人の名であるが、この語頭音を <y->、すなわち <ysopo>と綴るのはスペイン語訳のみである。古活字本の「いそほ」に非常に近いと言える。他の訳本では <St. Esopus(Lat. Esopus), Tup. Esopo(Lat. Esopus), Mac., Cax. Esope, Lat. Aesopus, It. Esopo, Fr. Esope, L' Estr. AEsop> である。天草本 <E-> は、これらの語頭音を参照した改変の可能性が高い。

Enno(えうぬす)の場合は語末音である。一見すると、古活字本の方がラテン語の音読形のように思えるが、実際は、次に示す如く、Tuppo と16世紀イタリア語訳以外の語末は全て<-us> である。St. Enus(Lat. Enus), Tup. Enno(7)/Eno(1)(Lat. Enus), Mac., Cax. Enus Sp. enus, Lat. Ennus, It. Enno, Fr. Ennus, L' Estr. Ennus, (Cf. Gr. Ennos)

もちろんスペイン語訳も <enus> であり、古活字本の「えうぬす」と対応する。他方、天草本の <Enno> の語尾 <-o> は16世紀ラテン語訳などの <Ennus>をポルトガル語化したものと考えたい。このラテン語訳と、それを「底本」としたと見做されるフランス語訳、および L' Estrange でも <-nn-> となり、天草本の綴り字と一致することも傍証として挙げられよう。Steinhöwel直系の15世紀末の訳では —— Tuppo の <Enno>(ただし <Eno>の例が1例見られる)を除いては —— 全て <-n->である。

Samo(さん, さむ)の場合も語末音が問題となる。これは小アジアのエフェソス沖にある島(Lat. Samus, Samos)である。この語については、Lat. (1530/1542) —— St., Tup. の Lat. も同様に —— では、対格形 <Samum>で現れる。St. のドイツ語訳では、このラテン語形 (Samum)がそのまま用いられ、Tup. と16世紀イタリア語では <Samo> である。Mac. と Cax. では <Samye>であるが、16世紀フランス語訳と L' Estr. では、ギリシア語あるいはラテン語の主格形 (Samos)が、そのまま用いられている。これらから考えるに、天草本の「Samo(サモ)」は、やはり、ラテン語のポルトガル語化したものとするのが妥当ではあるまいか。

他方、古活字本の「さん, さむ」については、スペイン語訳(1498)に現れる形 <samum, samun, samú> の —— あるいは将来見つかるかもしれないポルトガル語訳のそれらの —— 語末音の曖昧になった表記と取れまいか?

5. 天草本・古活字本における語末音について

「天草本における、ラテン語のポルトガル語化」について、もう少し詳しく触れておき

たい。これまでに挙げた語(Bsopo, Lycero, Nectenabo, Enno, Samo, Gripho)以外にも、天草本では、Xantho<Xanthus, Cresso<Croesus, Egypto<Aegyptus, Ermippo<Hermippus, Collegio<collegium, MAXIMO PLANUDE<Maximus Planudes の如く、悉くポルトガル語化していることが分かる。他方、古活字本でも —— 先に述べた如く「りくうるす(りくるす)」, 「えうぬす」を除いては —— 同様のことが言える。「いそほ・ねたなを・きりほ・しやんと・けれそ・えしつと(ゑしつと, えしつ, ゑしつ)・ゑりみほ」である。そして、「りくうるす」と「えうぬす」に関しては、スペイン語訳(1489)などにおいても、その形(licurus, enus)の見られることを指摘して(3.4. 節参照)、底本としても矛盾しないことは既に触れた。それでは、「しやんと」以下の語の場合は、他のヨーロッパ諸本では如何なる形で現れているのか、以下で検討してみたい。まず Ermippo(ゑりみほ)である。

St. Hermippus(Lat. Hermippus), Tup. Hermipone(Lat. Hermippus), Mac., Cax. Herope, Sp. hermipo, Lat. Hermippus, It. Ermippo, Fr. Hermippus, L' Estr. Hermippus .

これはイソップの生命を救った友人の名であり、ギリシア語でも <hermippos>と綴る。多くはラテン語(の主格形)をそのまま用いている。古活字本の表記「ゑりみほ」は、ここでも —— 語尾表記に関して —— スペイン語の形が最も近いと言える。さらに、他例のように、<-pp->でなく、<-p-> である。他方、天草本の「Ermippo(エルミッポ)」の場合は、<-pp->であり、ラテン語の名残を —— 語頭の <H-> は落ちているが —— 留めているとも言える(文字についての、いわば「視覚的」対応については、後述する)。ラテン語本を参照したポルトガル語化と考える所以である。なお、これは、It. Ermippoの形とピタリと一致するが —— 先に挙げた Tup., It. Enno の例と同様に —— 「ポルトガル語化」推定の傍証となろう。

Egypto(ゑしつと, ゑしつ)の古活字本形は、前者8例、後者3例である。天草本のそれと、より対応するのは前者の方である。後者の表記(ゑしつ)は語末音 -o の脱落あるいは弱化によるものと考えるが、今回用いたテキストの中では —— Mac., Cax., Fr., L' Estr. の Egipte, Egypte, AEgypt は別にして —— 語末音の脱落・弱化形は見当たらない(St. Egipto, Tup. Egipto/Egipto, Sp. egipto, Lat. Aegyptum, It. Egitto)。ただし、将来参照できるかも知れないポルトガル語訳などにおいて、例えば<Egit>のような形が見られる可能性も残る。(-y-, -i-の「綴り字」の違いについては後述したい。)

次に哲学者 Xantho(しやんと), リディア王 Cresso(けれそ)である。この2語については、トゥッポーおよび16世紀イタリア語訳を除いて、他の全ての訳本でラテン語の(主格の)形を用いている。スペイン語訳(1489)も例外でない。これは何を意味するか?

St. Xanthus(Lat. Xanthus), Tup. Xantho/Xanto(Lat. Xanthus/Xantus), Mac. Xantus,

Cax. Exantus/Exanctus, Sp. xanthus, Lat. Xanthus, It. Xanto, Fr. Xanthus, L' Estr. Xanthus, (Cf. Gr. xanthos)

St. Cresus(Lat. Cresus), Tup. Creso(Lat. Cresus), Mac. Cresus, Cax. Cressus, Sp. cresus, Lat. Croesus, It. Creso, Fr. Cresus, L' Estr. Croesus, (Cf. Gr. kroisos)

古活字本の「底本」が、もしこのスペイン語訳であったなら、その語末音節でこれらの語は対応しないことになる。少なくとも本稿の論理の展開上はそうである。確かに、古活字本 —— もっと厳密に言えば「原伊曾保物語」 —— の訳者が、これら2語に関しては、その段階でポルトガル語風の語尾に変えた可能性も残るが、用いたテキストを見る限りは、むしろトゥッポーあるいは16世紀イタリア語訳の方が —— 綴り字面での <-th>, <-t>; <-s>, <-ss> の問題を別にすれば —— ピタリと一致するのである。ただ、歴史的諸事情から鑑みて、このイタリア語訳本が直接の「底本」と考え難く、すでに何度か触れたように、このスペイン語本によく似た、他のポルトガル語・スペイン語訳本が見つければ、<Xantho, Creso> の形も見当たるかも知れない。が、現段階においては、上の両イタリア語訳がその存在の可能性を示唆している、と言うに止めたい。

ところで、古活字本における語末音 -s に関する表記の問題であるが、先に挙げた「りくうるす」, 「えうぬす」以外にも、「てるほす(Sp. 1489, delfos)」, 「あてえるす⁸⁾(Sp. athenas)」, 「ありしてす(Sp. aristes)」なども見え、これは<Sp. licurus, enus>の語末音表記「す」と平行した現象であると同時に、「底本」のある程度忠実な「表記」を匂わせる傍証となる。これに反して、<xanthus, cressus>の2語については、なぜ「しやんつす, けれすす」としなかったか? 上で、この(1489年刊)スペイン語訳以外の「底本」を推定した所以である。また、スペイン語ではなくて、敢えて「ポルトガル語風」云々したわけについても、例えば、1489年刊スペイン語訳では(寓話部も含めれば), griego, muerte, infiernoなどの語が見えるが、邦訳では、これらの語がそれぞれ<Grego, Morte>(天草本), 「ゐんへる野」(古活字本)の如く —— 二重母音化せず —— ポルトガル語的であることを考慮してのことである。

Sp. companya/compañia も天草本では <COMPANHIA>とされているが、これは最早「綴り字」の範疇に入る問題である。ただし、「底本」推定の過程においては、綴り字の「視覚的」異同についても無視すべきでないを考える。以下、資料を添えておきたい。

6. 天草本における「綴り字」について

<-th>の維持: Xantho (しやんと); 16世紀イタリア語訳, Macho, Caxton で <-t>となっている; Xanto, Xantus, Exantus/Exanctus. Tuppo のイタリア語、および併載のラテン語訳においても、Xantho, Xanthusと並んで、時折 Xanto, Xantus の形が見られる。

<-ph->の維持: Delphos(てるほす), Phrigia (ひりしや), Gripho(きりほ)。

St. Delphos(Lat. Delphos), Tup. Delphi(Lat. Delphos), Mac. Delfie, Cax. delphye,
Sp. delfos, Lat. Delphos, It. Delfo, Fr. Delphos/Delphes, L' Estr. Delphos

St. Phrigia(Lat. Phrygie), Tup. frigia(Lat. Frigius), Sp. frigia, Lat. Phrygiae,
It. Frigia, Fr. Phrygie, L' Estr. Phrygia

<-y-> の維持: Egipto, Lycero において維持され、Phrigia, Babilonia, Lidia,
Gripho では <-i->で綴られている。

St. Babilonia(Lat. Babilonia), Tup. Babilonia(Lat. Babilonia), Mac. Babilonne/
Babillonne, Cax. Babyloyn/Babyloyn, Sp. babilonia, Lat. Babylon, It. Babilonia
Fr. Babylone, L' Estr. Babylon

St. Lidia(Lat. Lydus/Lydorum), Tup. lidia/Lidoro(Lat. Lidus/Lidorum), Mac. Lydie/
Lindie, Cax. lydye/lyndye, Sp. lidia/lidos, Lat. Lydia/Lydum/Lydorum, It. Lidia,
Fr. Lydie/Lidie, L' Estr. Lydia/Lydian

St. Egipto/Egypcier(Lat. Egipto/Egiptii), Tup. Egipto/Egipto/Egicto(Lat. Egyptum
Egyptii/Eiptii), Mac. Egipte/Egypte/Egiptien/Egyptien, Cax. Egypte/Egypt/
egipt, Sp. egipto, Lat. Aegyptum/Aegyptios, It. Egitto/Bgittij/Bgitij, Fr.
Egypte/Egipte/Egyptien, L' Estr. ABgypt

他方、Cresso (けれそ) の <-ss-> は Caxton においてのみ見られ、ラテン語の
Croesus(-s-) とは対応しない。同様のことが Ermippo (ゑりみほ) についても言える。
<-pp->に関しては、ラテン語のそれを維持しているが、語頭の <H-> については消失して
いる。これは16世紀イタリア語訳のみに見られる形である。天草本が、もしラテン語本を
参照したとしたら、先の <-th-, -ph-, -y->の維持された例と同時に、<-ss-, H-, -i-> など
の、非ラテン語的綴り字の使用例も併せてその根拠が検討されるべきであろう。

おわりに

邦訳本の「底本」推定の一環として、人名・地名などの音表記について検討を試みた。
「原伊曾保物語」の —— 大筋では古活字本の —— 底本としては、スペイン語訳(1489)
が最も近いと言える。その根拠としては <amonja, ysopo, licurus, enus, nectanabo,
samú, hermipo, aristes, egipto>などと、古活字本 —— 時には天草本 —— のそれら
との対応が挙げられる。他方、Gripho (きりほ) の対応語が見られないことや、<xanthus,

cresus〉の語末音の不一致（しやんと、けれそ）は、このスペイン語訳に近い、他の訳本の存在を匂わせているとも言える。例えばポルトガル語訳である。

16世紀末当時、ポルトガル語・スペイン語の区分がどれほど明確であったか、筆者には現在確信は持てないが、1489年スペイン語訳に見られる〈griego, muerte〉は、天草本では〈Grego, Morte〉に、〈infierno〉は、古活字本で「ゐんへる野」となっていることは確かである。ついでに言えば、「りくうるす、えうぬす、はひらうにや、あもうにや、えうらうは、りいひや」などの（二重母音化的）表記もいささか気になる現象ではある。

また、天草本について言えば、もし「原伊曾保物語」と同時に、改めてラテン語本も参照したとしたら、その痕跡として、綴り字〈-ph-, -th-, -y-〉や〈-nn-, -pp-〉もまた挙げられよう。この場合は、それらの語が他のヨーロッパ本で〈-f-, -t-, -i-〉, 〈-n-, -p-〉となっておれば、益々その可能性が高くなると言えよう。

注とテキスト

- 1) 遠藤潤一：『邦訳二種 伊曾保物語の原典的研究』正編・続編・総編（風間書房）
- 2) 大塚光信：『キリシタン版 エソポ物語』付 古活字本伊曾保物語（角川書店）
新村出・柊源一：『吉利支丹文学集』下（日本古典全書）（朝日新聞社）
前田金五郎・森田武：『仮名草子集』（日本古典文学大系）（岩波書店）
- 3) Ruelle, P. : *L'Esope de Julien Macho, Recueil général des Isopets*,
T. 3e, (S. A. T. F.), Paris, 1982.
- 4) Ruelleは上掲書の Notesにおいて〈Amorium〉としている。
- 5) 〈Lycerus〉は誤解によるものと指摘している。
- 6) 上掲書（遠藤）「正編」p. 449 以下参照。
- 7) 全く別の人名が与えられている。
- 8) 「あてえなす」の誤記と見做される。

— . — . — . — . —
Versions latines: (1530) 広島文教女子大学蔵

: (1542) 天理大学図書館蔵

Steinhöwel: 上智大学図書館蔵

Tuppo: 天理大学図書館蔵

Caxton: 広島文教女子大学蔵

Version espagnole: (1489) 天理大学図書館蔵

Version française: (1561) 天理大学図書館蔵

Version française: (1645) 村上蔵

Version italienne: (16世紀中葉?) 天理大学図書館蔵

平成8年12月18日